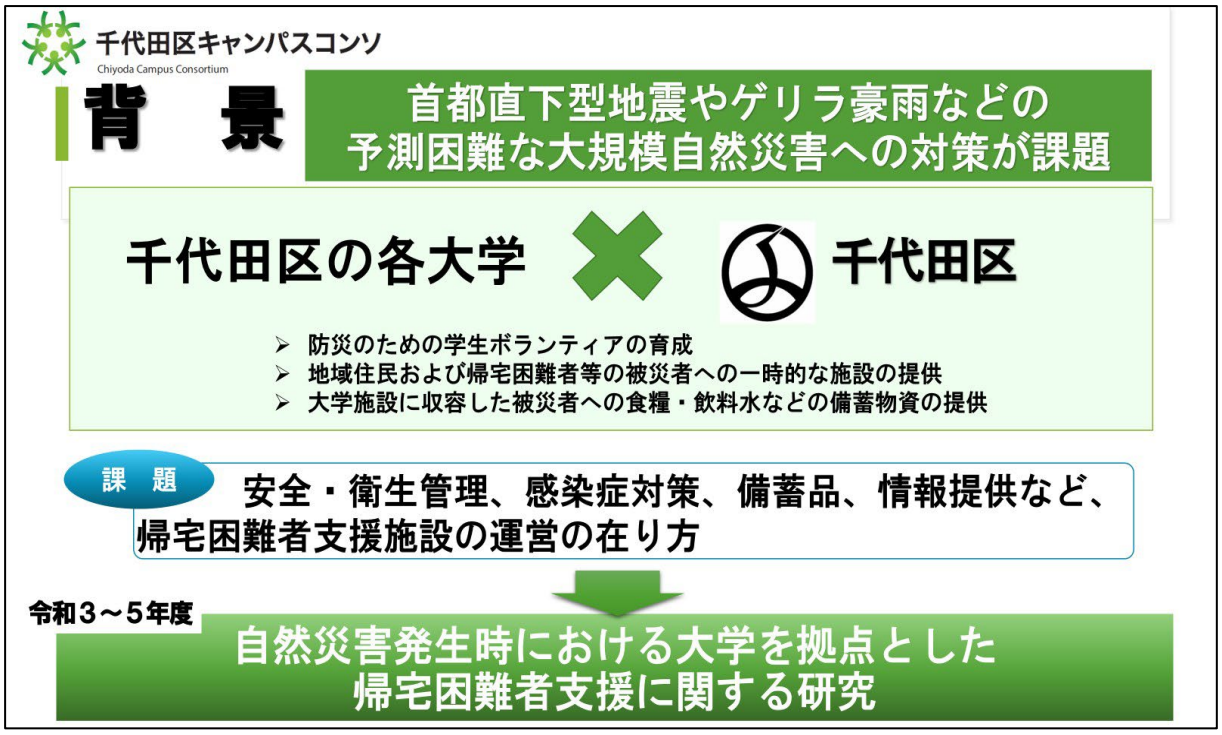
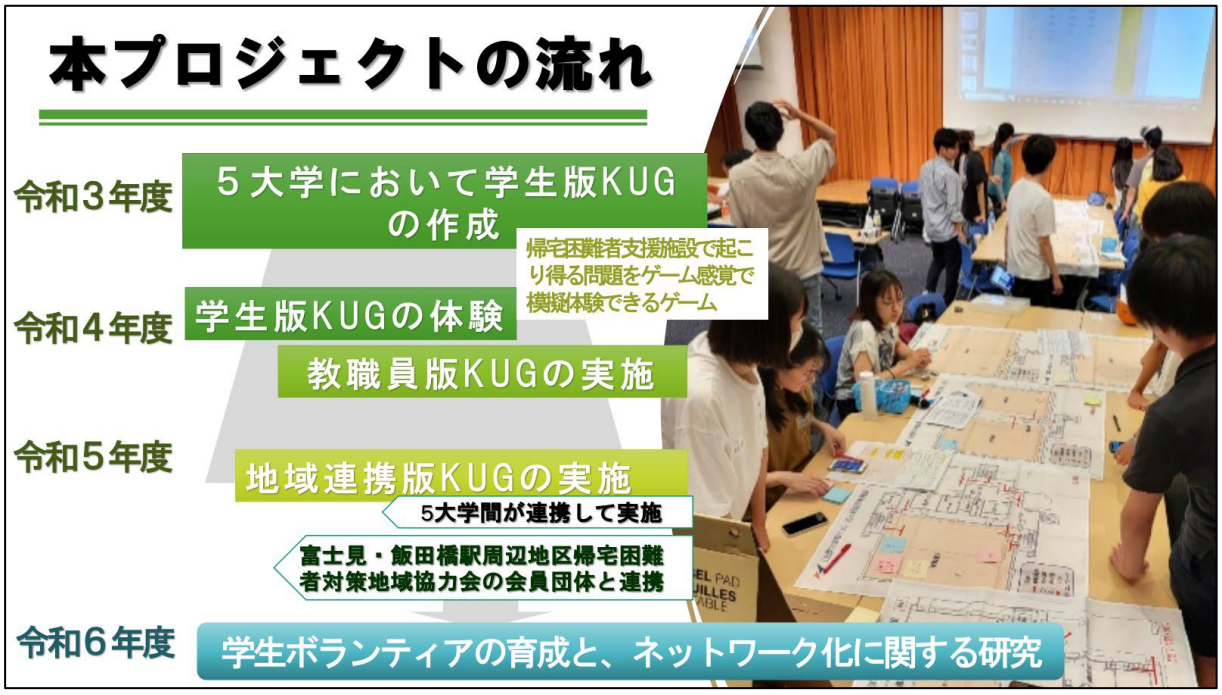
そのために、令和６年度、千代田区キャンパスコンソでの単位互換科目として、「課題解決型フィールドワーク～大規模災害自然発生時の大学キャンパスでの避難生活のマネジメントⅠ－千代田キャンパスコンソ及び近隣企業との連携」を開設し、各大学から受講生を募ることで学生災害ボランティアの育成を進める。学生は①大規模自然災害に関する知識を深める、②与えられた課題に対するグループワークによる実習及び演習を中心に、積極的なコミュニケーションを通して、想定される多様な避難者、および、避難所で生じる問題に対して臨機応変に対応することの難しさを共に学び、防災行動に対する複眼的な目を養うことを到達目標とする。教育内容については、各大学の研究者が参画すると共に、千代田区・災害救援ボランティア推進員会、千代田区社会福祉協議会、一般社団法人防災教育普及協会、および地域の関係団体、企業等と連携しながら、構築する。その一部には、令和５年度まで研究をすすめてきた各大学の KUG を活用した学習や、研究により得られた知見や解決した問題点などの資料（動画等）を活用していく。

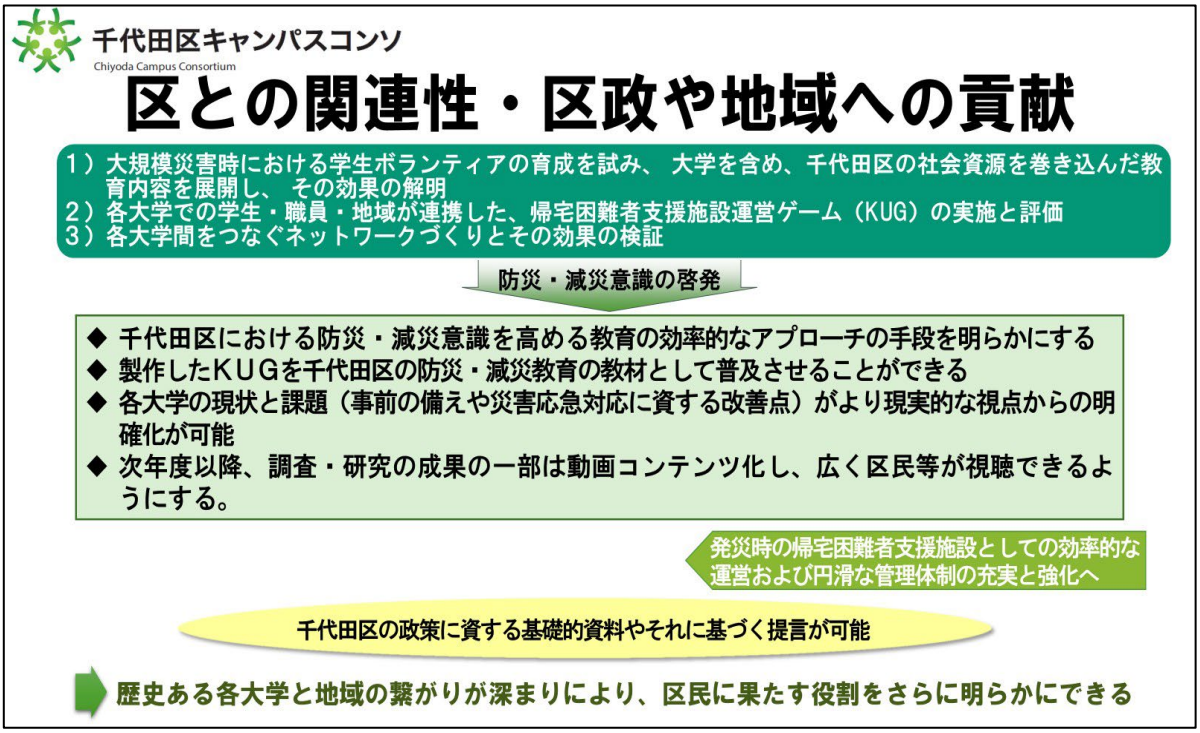




本事業では学生や区民の目線から帰宅困難者支援の在り方を見直すことを重視するため、その過程において行う学生を含めたボランティアの育成､｢帰宅困難者支援施設運営ゲーム（ＫＵＧ）｣やネットワーク化をはかることで防災・減災意識を啓発する。その結果から防災減災教育の効率的なアプローチの手段を明らかにするとともに、製作したＫＵＧを千代田区における防災減災教育教材として普及させ、発災時の帰宅困難者支援施設としての効率的な運営および円滑な管理体

制の充実と強化に資する。他方、より現実的な視点から各大学の現状と課題（事前の備えや災害応急対応などに資する改善点）が明確化されることが期待され、千代田区の政策に資する基礎的資料やそれに基づく提言が可能である。

また、帰宅困難者支援施設としての大学の施設規模や機能を区民に周知するための方法を千代田区ならびに区民や学生、近隣企業と協力して構築することによって、さらに歴史ある各大学と地域の繋がりが深まることが期待され、区民に果たす役割をさらに明らかにできる。本事業で作成したＫＵＧは、区内の大学のみならず各種学校や一般企業、区の職員対象にも展開可能であり、千代田区における防災・減災意識を高めるための教材として活用できる。また、調査・研究の成果の一部は動画コンテンツ化し、広く区民等が視聴できることを試みるものである。



資料 1　大規模災害時における協力体制に関する基本協定

地震等大規模災害時における、地域住民、在勤者等の安全確保や生活復興などの応急対策を迅速に推進するため、千代田区（以下「甲」という。）と　各　大学（以下「乙」という。）は、災害発生時及び平常時の協力体制の確保に関し、次のとおり基本協定を締結する。

（目的）

第１条　この協定は、地震等の大規模災害が発生した場合に、区民、在勤者及び区内訪問者等（以下「区民等」という。）の安全確保を図るために執る甲及び乙の協力体制について定めるとともに、平常時よりそのための協力体制を整備することを目的とする。

（協力要請）

第２条　甲は、乙に前条に規定する協力を要請する場合は、予め定めている甲乙双方の担当者等

を通じて行うものとする。

（協力）

第 3 条　乙は、甲から、前条の規定による協力要請を受けた場合は、協定の内容にしたがって可能な限り協力に努めるものとする。ただし、真にやむを得ない事情により 協力要請に応じられない場合はこの限りでない。

（協力内容）

第 4 条　前条に規定する協力の内容は、次のとおりとする。

(1)甲から派遣要請のあった被災場所及び避難所等への学生ボランティアの派遣

(2)区民等の安全確保のための、大学施設の一部の一時的避難施設としての提供（この一時的避難施設は、甲が地域防災計画において予め規定する避難所及び帰宅困難者支援 場所への避難が、災害状況及び天候等により困難な場合に、二次的施設としての使用とする。）

(3)大学施設に収容した被災者への応急医療資材及び備蓄物資の提供（提供できる資器材等を有しない場合を除く。）

(4)その他の協力要請事項

（ボランティア組織の整備）

第 5 条　乙は、前条第 1 号による派遣を行うため、予め、学生ボランティアの募集、登録、養成等を行うこととする。

2　甲は、前項の規定による乙の活動に対して、必要な資器材の提供や養成にかかる経費等への支援を予算の範囲内で行うこととする。

（施設提供期間）

第 6 条　第 4 条第 2 号に規定する施設の提供期間は、原則として災害発生直後の初動期間(1 週間程度)とし､被災者が自宅に帰宅又は代千田区が 指定する施設に移動するまでの期間とする。ただし、これを超えて使用する場合は、甲及び乙の協議により決定する。

（経費の負担）

第 7 条　第 4 条の協力に要した経費は、原則として、甲が負担するものとする。

（実施細目）

第 8 条　ボランティア養成にかかる支援内容及び資器材内容、施設提供にかかる具体的施設・収容人員等、本協定の実施に必要な事項については、実施細目に定める。

（協議）

第 9 条　この協定に関する疑義や定めのない事項については、甲乙協議のうえ決定するものとする。

（附則）

1　この協定は、平成 21 年 3 月 19 日から適用する。

2　この協定の成立を証するため、本書 2 通を作成し、甲乙双方記名押印のうえ、各 1 通を保有する。

資料 2　大規模災害時における協力体制に関する基本協定実施細目

（趣旨）

第 1 条　この細目は、千代田区（以下「甲」という。）と　各大学（以下「乙」という。）が締結した大規模災害時における協力体制に関する基本協定（以下「協定」という。） 第 8 条の規定に基づき、協定内容の実施に関し必要な事項を定めるものとする。

（協力）

第 2 条　乙は、協定第 2 条に基づく甲からの要請がない合場においても、緊急を要するときは、乙の判断により協定第 4 条に規定する協力内容を実施することができる。この場合には、その旨を遅滞なく甲に連絡するものとする。

（施設の確認）

第 3 条　乙は、協定第 4 条に基づく一時的避難施設の提供を実する施場合は、事前に当該施設の安性全を疇する。

（施設の提供）

第 4 条　協定第 4 条に基づく一時的避難施設は別表 1 のとおりとする。

（指定）

第 5 条　甲 は、協定第 2 条により甲の要請が乙に受諾された場合又は本細目 2 第条の乙の連絡により被災者を受け入れる施設の指定が必要と判断した場合は、別 1 記号様第式により当該施設を一時的避難施設 として指定するものとする。

2　前項の指定は、緊急を要する場合には口頭で行い、事後速やかに当該様式を交付するものとする。

（指定解除）

第 6 条　甲は、次の各号に該当する場合、甲乙協議のうえ、避難者の一時的受入施設としての指定を解除し、その旨を別記第 1 号様式により乙に連絡するものとする。

(1) 避難者の一時的受入施設の必要がなくなったと甲が判断した場合

(2) 避難者の一時的受入施設としての指定解除を乙が甲に要望した場合

(3) その他、甲又は乙が避難者の一時的受入施設としての指定解除を必要と認めた場合

（資器材の提供）

第 7 条　協定第 5 条第 2 項に規定する必要な資器材とは、ボランティア活動及び帰宅困難者支援に必要な資器材とし、別表 2 に掲げる資器材の中から、双方で協議の上決定する。

（経費の負担）

第 8 条　乙は、協定第 4 条に規定する支援に要した費用について、すみやかに別 2 記号第様式により甲に報告するものとする。

（学生ボランティア）

第 9 条　学生ボランティアは、乙に在学するものをその対象とする。

（学生ボランティアの役割等）

第 10 条　学生ボランティアの主な役割は次のとおりとする。

(1)区内小中学校等の区が指定する避難所での被災者援助
(2)帰宅困難者の支援
(3)避難所防災訓練等、近隣で開催される訓練への協力
(4)その他区の要請による支援活動

（学生ボランティアの派遣）

第 11 条　学生ボランティアの派遣要請は甲から乙に対して行うものとする。

2　乙は、甲の要請に基づき、可能な限り学生ボランティアの派遣に努めるものとする。ただし、やむを得ない事情等により要請に応じられない場合はこの限りでない。

（学生ボランティア養成等）

第 12 条　学生ボランティアの養成等の実施に際しては、乙は甲と連携して行うものとする。

2　甲は、乙の実施する学生ボランティアの養成事等業の 1 回に対して、教材費、講師料など、必要と認められる費用のうち 3 0 万円を限度に負担金を交付することができる。

3　乙は、前項に規定する負担金の交付を受けようとするときは、社会福祉法人千代田区社会福祉協議会（以下「協議会」という。）に対し、申請等の手続きを行うものとする。

4　乙は、学生ボランティアの募集及び登録を甲及び協議会にその進捗状況を報告するものとする。ただし、学生ボランティア登録情報については、年に 1 回、人員変更の有無及びその内容を甲に報告しなければならない。

5　学生ボランティアとしての養成を受けた者については、当該ボランティアに登録するものとする。

（損害補償）

第 13 条　ボランティア活動に関し、学生ボランティアが被った損害の補償はボランティア保険によるものとする。

2　前項のボランティア保険の加入金については、甲が負担するものとする。

（その他）

第 14 条　本実施細目に定めのない事項及び解釈に疑義が生じた場合は、甲乙協議の上決定するものとする。

附　則

この規定は、平成 23 年 2 月 7 日から施行する。

この規定は、平成 26 年 3 月 14 日から改正、施行する。

資料 3　大学備蓄品(千代田区大規模災害時における協力体制に関する基本協定に基づく備蓄品)

2024.12 現在

品　名	東京家政学院大学	大妻女子大学 大妻女子大学短期大学部	共立女子大学 共立女子短期大学	二松学舎大学	法政大学	専修大学
受入対象者	原則　女性及び子供	原則　女性及び子供	原則　女性及び子供	地域住民、在勤者及び区内訪問者等	在勤者及び区内訪問者等	地域住民、在勤者及び区内訪問者等
収容可能人数	428 人	1281 人	767 人	330 人	1260 人	664 人
アルファ化米 (白粥、わかめご飯)	○600 食	○1750 食	×	○1500 食	×	×
アレルギー対応 ライスクッキー	○3888 個	×	○6912 個	○3936 個	×	○6000 個
ビスケット	×	○11328 食	×	×	○11376 食	×
ミネラルウオーター 500ｍｌ	○7704 本	○22656 本	○13824 本	○11664 本	○22680 本	○11952 本
缶詰(さんま蒲焼)	×	×	×	○750 缶	×	×
使い捨て哺乳瓶 240ml (5 個入)	○39 セット	○114 セット	○69 セット	×	×	×
粉ミルク	○1 缶	○1 缶	○3 缶	×	×	×
アレルギー対応 粉ミルク	○1 缶	○4 缶	×	×	×	×

子供用紙おむつ（L サイズ）	○108 枚	○270 枚	○594 枚	×	×	×
子供用紙おむつ（M サイズ）	○128 枚	○256 枚	○576 枚	×	×	×
子供用紙おむつ（S サイズ）	○82 枚	○246 枚	○588 枚	×	×	×
子供用紙おむつ（新生児用）	○88 枚	○176 枚	○630 枚	×	×	×
ウエットティッシュ（からだふき）	○60 袋	○152 袋（4560 枚）	○92 袋	×	×	×
タオル	○200 枚	○600 枚	○360 枚	×	○200 枚	○200 枚
消毒液	○4 本（L）	○11 本（L）	○21 本（L）	×	×	×
公衆電話	○2 機	×	×	○3 機	×	×
ゴザ	×	×	×	×	○300 枚	×
軍手	×	×	×	×	○300 双	○300 双
ヘルメット	×	×	×	×	○50 個	○60 個
腕章	×	×	×	×	○60 枚	○60 枚
折りたたみ式リヤカー	○	×	×	×	○1 台	○1 台
段ボールベッド段ボール仕切り	×	×	×	○ベット 40 箱、仕切り 37 箱	×	×
給水袋（500 ｍｌ）	×	×	×	○6000 枚	×	○800 枚

テント(組立式)	×	×	×	○4 張	×	○2 張
アルミブランケット	○450	○1500	○770	○350	○1260	○700 枚
毛布	○500 枚	×	×	○780 枚	○1480 枚	○390 枚
トイレ	携帯 6420 個	簡易(便座有)18870 個	携帯 1160 個	携帯 7900 個、マンホールトイレ 3 台	携帯 19400 個	携帯 10260 個、災害対策用トイレ 2 個
備考	帰宅困難者受入れ施設用看板		帰宅困難者受入れ施設用看板	帰宅困難者受入れ施設用看板、九段小学校及び九段幼稚園から預かっている備蓄品を含む	帰宅困難者受入れ施設用看板	帰宅困難者受入れ施設用看板

CHAPTER 2

第2章
ボランティア育成

第１節　千代田区の災害に関するウィキペディア記事執筆ワークショップ

谷島　貫太（二松学舎大学　文学部）

1 はじめに

「ウィキペディアタウン」という名称で知られるワークショップがある。これは、オンライン百科事典 Wikipedia を活用し、地域の文化財や歴史的な名所を対象に、参加者が共同で記事を執筆・編集する試みである。実施方法にはいくつかのバリエーションがあるものの、多くの場合、街を実際に歩いて現地の様子を観察・取材し、さらに文献資料を参照しながら記事を作成するという流れで進められる。このプロセスを通じて、取り上げる対象への理解が深まり、学びを得ることができるだけでなく、自らが執筆した内容が Wikipedia 上で公開されることで、その対象に対する愛着や責任感が芽生えるという効果も期待できる。その他にも多くの利点があり、ウィキペディアタウンは総合的な学習の機会として注目されてきた。コロナ禍以前には、日本各地でほぼ毎週のようにこのワークショップが開催されていた。

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2024 年度千代田学の研究プロジェクト「大規模災害時における学生ボランティアの育成とネットワーク化」に関連し、「災害」をテーマにしたウィキペディアタウンを実施した。千代田区における災害関連のトピックについて Wikipedia の記事を執筆することで、防災や災害の歴史に関する学習の機会を創出することが目的である。本章では、2025 年 1 月 19 日に行われたワークショップの実施内容について報告する。

1.1 ゼミとウィキペディアタウン

谷島ゼミでは、2018 年度からゼミ活動の一環としてウィキペディアタウンを継続的に実施してきた。今年度の活動について報告する前に、まずはこれまでの経緯を簡単に整理しておく。

地域の文化財に関する高品質なウィキペディア記事を作成するには、多様なスキルが求められる。文献を精読し、重要な情報を適切に抽出し、対象に応じたバランスの取れた記事構成を考案し、簡潔かつ正確な文章を書く能力が必要となる。これらのスキルは、大学生が学びを深める上でも不可欠なものだ。それに加えて、記事に掲載する写真を撮影し、それをウィキメディア・コモンズにアップロードしてウィキペディアの記事に組み込むには、一定の IT リテラシーが求められる。また、著作権に関する基礎的な知識を身につけておくことも欠かせない。さらに、大学の周辺地域にある文化財を取り上げることで、その地域に関する知識を深めることができるだけでなく、ワークショップへの一般参加を可能にすれば、地域住民との交流の機会も生まれる。

現代の学生にとって、ウィキペディアは学習の過程で避けて通れない存在だ。知識の流通インフラとして機能しているウィキペディアに対して、単に使用を禁止するのではなく、どのように向き合うべきかを考えるリテラシーを身につけることが重要となる。実際に記事執筆のプロセスを経験することで、ウィキペディアを適切に活用するための基本的なリテラシーを学ぶことができる。ウィキペディアタウンは、こうした総合的な学びの場として機能するのである。

ただし、ウィキペディアタウンに参加するだけでなく、主催や運営に携わる場合には、また別の貴重な経験を積む機会となる。運営側の立場では、まずワークショップのテーマを決定することから始めなければならない。そのためには、対象となる地域について十分に調査する必要があり、準備の段階で現地を歩いて回ったり、図書館で関連資料を調べたりする作業が求められる。また、参加者を募るための広報活動も重要であり、その際にはワークショップの意義を適切に説明できることが求められる。さらに、地域住民の協力を得ようとするならば、自然と地域とのつながりが生まれてくる。谷島ゼミでは、単にウィキペディアタウンに参加するだけでなく、その企画・運営を学生自らが担うことで、地域の情報発信と地域との関わりを主体的に生み出す機会として位置づけてきた。

2 災害とウィキペディアタウン

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2018 年度よりウィキペディアタウンをゼミ活動の一環として実施してきた。しかし、2020 年度以降は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、一時休止を余儀なくされた。2022 年度に活動を再開し、「災害」をテーマにしたウィキペディアタウンを開催することとなった。

ウィキペディアタウンを実施するにあたっては、執筆対象となるトピックの選定が重要である。選定に際しては、(1) まだウィキペディアに記事が存在しないこと、(2) 独立した記事として取り上げる価値があること、(3) 記事執筆にあたって十分な文献資料が利用できること、の三点を満たす必要がある。すでに多くの歴史的文化財が記事化されている中で、未執筆のテーマを見つけることは容易ではなく、また興味深い対象であっても十分な出典を確保できなければ執筆は困難となる。そのため、ウィキペディアタウンでは、慎重に資料を精査し、出典を明示しながら記事を作成することが求められる。

2022 年度は、千代田学採択事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」と連携し、淡路公園と南明館を取り上げた。淡路公園は、関東大震災後に復興小学校として再建された淡路小学校の敷地に設けられた復興小公園を起源とし、公園の歴史を通して震災復興のプロセスを学ぶ機会を提供した。一方、南明館は、明治から大正にかけて神田小川町に存在した勧工場であり、その前身である洽集館が明治 25 年の神田の大火で焼失した後に再建された。神田地区は繰り返し大火の被害を受けており、この事例を通して地域の火災の歴史を掘り下げることを目的とした。

2023 年度には、2022 年度の成果を発展させ、神田の大火そのものに焦点を当てたワークショップを実施した。これは前年に取り上げた南明館とも関係が深く、地域の防災史の視点から新たな知見を加える狙いがあった。

2024 年度は、さらに神田の大火に関連する二つのトピック、「東明館」と「文房堂」に焦点を当てたワークショップを実施した。東明館は、南明館と並び神保町地区で大きな存在感を持っていた勧工場であり、明治から昭和初期にかけての商業文化を象徴する施設であった。一方、文房堂は日本における画材販売の先駆けとなる店舗であり、大火の被害を受けながらも営業を続け、現在まで存続している。これらの施設を取り上げることで、神田地区の火災の歴史と、その後の

復興の歩みについてより多角的に考察することを目指した。

本報告では、2024　1月に実施したウィキペディアタウンの企画・運営の過程、実際のワークショップの様子、そして得られた成果について詳述する。

2.1

2024年度のウィキペディアタウンに向けた準備では、例年とは異なり、トピックの選定から学生スタッフが主体的に関与する形をとった。これまでは、教員の谷島が候補を挙げた上で学生スタッフが調査や記事執筆を行う流れが一般的であったが、今回は学生自身がテーマ設定を行い、現地調査と資料収集を進めながら執筆対象を絞り込むことを試みた。

トピックの選定にあたっては、2022 年度以降のワークショップと同様、「災害」をキーワードとして設定した。神田地区は歴史的に繰り返し大火や震災の影響を受けており、こうした災害の痕跡をたどることで、地域の歴史や防災の視点を学ぶ機会となると考えた。

まず、学生スタッフは神保町の街を実際に歩き、歴史的建造物や地域に残る痕跡を観察しながら、災害の影響が見て取れる場所を探索した。また、千代田図書館に赴き、地域の災害史に関連する文献や資料を精査することで、執筆対象として適切なトピックを絞り込んだ。その結果、最終的に「文房堂」「東明館」「駿河台図書館」の三件が候補として挙がった。

図 2.2.1　文房堂壁面 1（『神田写真集』タウン誌"神田っ子"十二人の仲間 編）

文房堂については、関東大震災や神田の大火の被害を受けながらも営業を継続し、現在まで存続している点に着目した。学生スタッフが文房堂に直接コンタクトを取り、公式ウェブサイトの歴史紹介の根拠となっている資料について問い合わせたところ、所蔵資料の一部を教えてもらうことができた。さらに、千代田図書館で関連資料を調査し、文房堂の災害からの復興に関する記録を収集した。

駿河台図書館については、関東大震災後の復興過程に関する記録が比較的多く残っていたことから、災害との関連性の観点で注目された。千代田図書館が作成した駿河台図書館のパンフレットを手がかりに、図書館スタッフに関連資料の所在について助言を求めた。また、過去の図書館年報や建築関係の記録を調査し、駿河台図書館の創設経緯や震災後の再建プロセスについての情報を収集した。

東明館については、2022 年度に南明館を扱った際に収集した資料を活用しながら、国立国会図書館のデジタルコレクションや明治・大正期の新聞記事を調査することで、より詳細な情報を収集した。特に、神田の大火による被害状況やその後の再建の過程、当時の商業環境との関係についての記述を探し、神田地区における勧工場の歴史的な位置づけを明らかにすることを目指した。

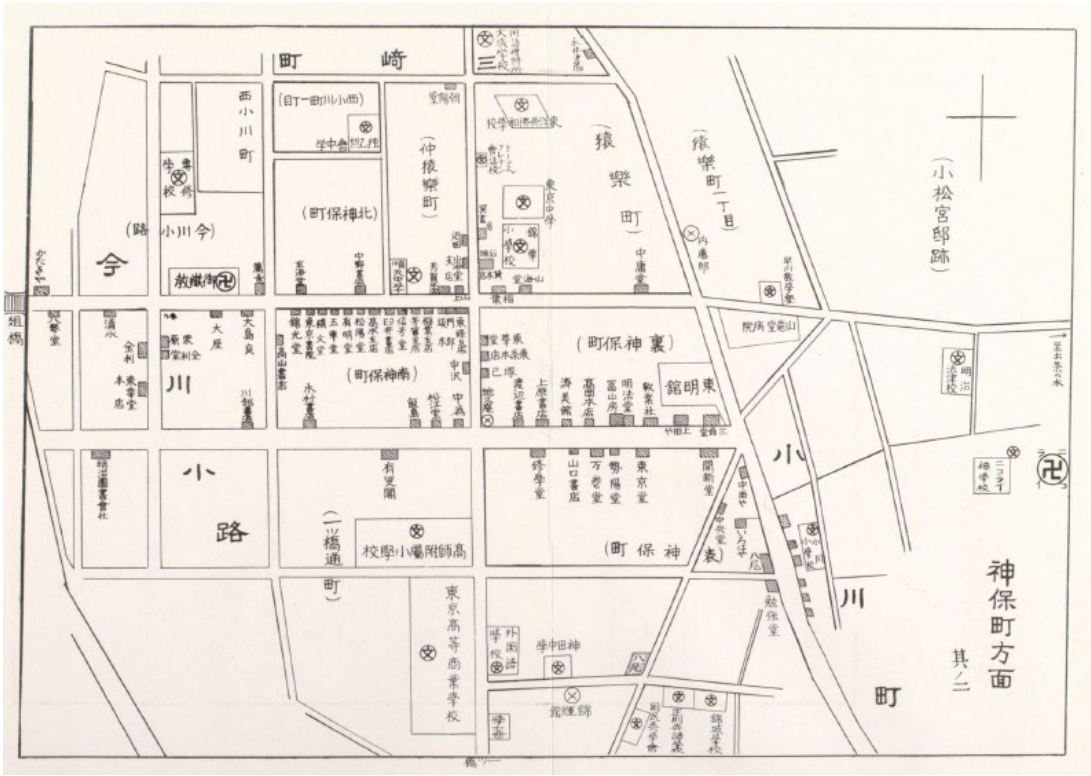


図 2.1.2 中央右に東明館が記載（神田古書籍商史編纂会編『稿本神田古書籍商史 ： 年表』）

今回の資料調査では、千代田図書館を中心に、必要に応じて日比谷図書文化館や国立国会図書館の所蔵資料も活用した。特に、日比谷図書文化館の特別研究室に保存されている古書や、国立国会図書館デジタルコレクション内の明治期の新聞記事は、各施設の歴史を詳しく掘り下げる上で貴重な情報源となった。

これらの調査を経て、最終的に 2024 年度のウィキペディアタウンでは、「文房堂」と「東明館」を執筆対象とすることを決定した。駿河台図書館についても一定の資料は集まったが、既存の研究や記録が十分に整理されており、ウィキペディアに新規記事として追加するための独立性の面でやや課題があったため、今回は見送る形となった。収集した資料リストの一部を本章末尾に掲載する。

2.2 広報と本番準備

資料調査と並行して、ワークショップの広報と本番準備を進めた。広報については、イベント管理プラットフォームの Peatix を活用し、開催概要や趣旨を公開した。広報開始がワークショップの約 1 か月前とやや遅くなったものの、最終的に 12 名の参加者が集まった。

街歩きのルート選定については、今年度は教員が関与せず、学生スタッフだけで企画を行った。まず、執筆対象となるトピックとの関連を重視しながら、神保町・神田地区の歴史や災害の痕跡をたどるルートを検討した。加えて、参加者が無理なく歩ける範囲で、地域の歴史的背景を体感できるよう考慮した結果、以下のルートを策定した。

1. **ワークショップ会場（始点）**

2. **甲武鉄道飯田町駅（中央線の前身）**
3. **飯田町周辺の歴史的建造物**
4. **九段勧業場（かつての商業施設）**
5. **東明館（今回の執筆対象の一つ）**
6. **文房堂（今回の執筆対象の一つ・終点）**

このルート策定のため、学生スタッフは現地を実際に歩き、各地点の歴史的意義や災害との関連を調査した。例えば、甲武鉄道飯田町駅は明治期の都市開発と関東大震災後の復興と密接に関わる地点であり、九段勧業場や東明館は、かつての商業施設として神田の大火などの影響を受けながらも地域の経済活動に貢献した歴史を持つ。また、文房堂は震災による被害を受けつつも再建され、現在まで存続している点が今回のテーマに合致すると考えられた。

図 3 九段勧業場（日本実業史博物館準備室旧蔵資料）

街歩きの準備として、各地点の歴史的背景をまとめた資料を作成し、当日はガイド役の学生が解説できるようにした。文房堂については、事前に学生スタッフが公式サイトの情報をもとに、実際に店舗を訪れて追加の情報を収集した。東明館については、国会図書館のデジタルアーカイブや明治・大正期の新聞記事を活用し、当時の建築様式や利用実態を整理した。

また、ワークショップの円滑な運営のため、当日の役割分担も事前に決定した。受付・案内係、街歩きのガイド役、ウィキペディア編集サポート係の 3 つの役割を設定し、各担当が準備を進めた。こうした広報・準備を経て、ワークショップ本番ではスムーズな進行が可能となった。

2.3 ウィキペディアタウン当日

ワークショップ当日は、開始 1 時間前にスタッフが集合し、会場設営と参加者の受付を行った。準備段階で机や椅子の配置を整え、当日使用する資料を並べ、Wi-Fi 環境やプロジェクターの動作確認も行った。定刻になると参加者が続々と集まり、受付では参加者リストを確認しながら資料を配布した。

今回のワークショップでは、ウィキペディア編集の経験を持つ参加者と、初めて編集を行う参加者がバランスよく混在していた。以前のウィキペディアタウンに参加したことのある参加者もいたが、日常的に記事執筆をしている参加者は 1 名のみで、大半の参加者は、過去に編集経験があっても詳細は覚えていないというレベルであった。そのため、初めての参加者でもスムーズに進められるよう、進行の各段階で十分な説明を行うことを意識した。

○　当日のタイムテーブル
10:00 - 10:15 受付
10:15 - 10:50 イベント趣旨説明およびウィキペディアの編集についての解説
10:50 - 12:00 フィールドリサーチ／記事用の写真撮影
12:00 - 13:00 昼食休憩
13:00 - 15:30 記事執筆
15:30 - 16:00 記事講評／振り返り
16:00 解散

オリエンテーションと趣旨説明

ワークショップは定刻の 10 時に開始し、冒頭ではファシリテーターの Araisyohei 氏によるオリエンテーションが行われた。その後、今回の執筆対象である「文房堂」と「東明館」について、学生スタッフが説明を担当した。事前調査で得られた情報をもとに、両施設の歴史的背景、災害との関わり、現在の状況について簡潔に解説し、参加者が執筆する記事の全体像を把握できるようにした。

続いて、ウィキペディアの編集についての基本的な説明が行われた。ウィキペディアの執筆に際しては、出典を明示することが必須であること、著作権に関するルールを守る必要があること、記事の中立性を確保することが求められることなど、編集上の重要なポイントが紹介された。初心者向けの解説として、実際のウィキペディアの記事を例に挙げながら、構成の作り方や出典の記載方法について説明が行われた。

街歩き

10 時 50 分からは、ワークショップの重要な要素のひとつである街歩きを実施した。今回のルートは、事前に学生スタッフが主体となって選定したものであり、当日も中心的な役割を果たした学生がガイドを務めた。

各地点では、ガイド役の学生が事前に準備した資料を基に解説を行い、参加者は時折立ち止まりながら話に耳を傾けた。歴史的建造物や神田地区の商業施設の変遷についての説明が加えられ、参加者が実際の風景を見ながら、過去の災害の痕跡や復興の過程を学べるよう工夫された。

図 2.1.4 「東明館前通りの図」(『東京名所図会 神田区之部』)

文房堂では、現在の店舗の景観がどのように維持されているのかについて議論が交わされ、また店舗の外観や店内の特徴を撮影する時間が設けられた。約 1 時間の街歩きを終えた後、参加者は各自昼食を取り、13 時に再集合した。

記事執筆

午後の作業では、まずチーム分けを行った。ウィキペディアの編集経験が豊富な参加者、過去に少し編集したことがある参加者、今回初めて編集する参加者がバランスよく配置されるよう調整した。

チーム分けの後、ファシリテーターが記事執筆の準備としてミニワークショップを実施した。このワークショップでは、与えられた資料をもとに、どのように重要な情報を手分けして抽出し、それらを集約して文章を構成するかの練習を行った。参加者同士で意見を交わしながら、情報の取捨選択や要約の仕方を学んだ。

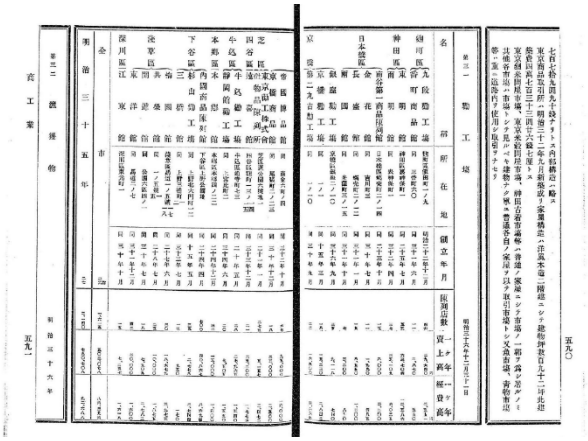


図 2.1.5 開業当初の東明館の規模がわかる資料(東京市役所編『東京市統計年表』)

本格的な執筆作業に入ると、まず資料の読み込みを行い、その後記事の構成を考えた。ホワイトボードに情報を整理しながら、どの順序で内容をまとめるか議論が進められた。その後、執筆

担当を決定し、それぞれの担当者が文章を作成し始めた。

ウィキペディアタウンの執筆作業は、後半になるほど加速していく。作業が進むにつれ、参加者たちの集中度が高まり、会場内にはキーボードを打つ音が響くようになった。途中、スタッフが適宜資料を提供し、参加者が参考文献を確認しながら執筆を進められるようサポートした。

最終段階では、記事の統合作業が行われ、編集競合を避けるために順番に投稿作業を進めた。最後に、撮影した写真をウィキメディア・コモンズにアップロードし、記事内に反映させた。出典情報の整理にも時間を要したが、ファシリテーターのアドバイスを受けながら、適切なフォーマットで出典を追加していった。

(282) 神田人物誌

文房堂・筆墨・硯・紙・小物・文具・教材・商業

池田治郎吉君

神田區表神保町二番地
電話淡路三一四番・三四四二番

文房堂は先代治郎吉氏の創立に係り當主之を紹ぐ先代隠居して家名を譲り應誠と稱す應誠氏文具の將來に嘱目して明治二十年表神保町二番地に店舗を開く二十五年神田大火に遭ふて全部烏有に歸し去つて裏神保町一番地に假營業所を設く後ち工事を起して原所現住所に業を開く時恰かも日清戰捷の餘波一般經濟界の發展を齎來し文明的文房具の需用亦著しく發達し來れり

爾來歐米文具の普及と共に意匠向に最も意を用ひ凡てに向つて一新機軸を樹て、顧客の意を迎ふ然るに計劃通中して文房具といへば直ちに神田文房堂を聯想するに至れり如斯して商運頓に加り以て今日の盛を致すに至れり君幼名を弘三と稱す父治郎吉氏の長子たり明治十四年十二月京橋に生る學歴としては僅かに錦華小學を卒へたるに止まると雖ども天禀の商才は良く父を助けて遺算なかりき大正二年先代の隠居に際し家名治郎吉を襲名して以て今日に至る商號酒は櫻鑛として堂に在り嚴君同町一番地に隠居し閑悠を事とし盆栽を愛し悠々自適老後を楽ふ

夫人常子は京橋南森正吉氏の女にして大正二年氏に嫁し一男を挙ぐ

図 2.1.6　文房堂創設者池田治郎吉についての記事（桑原萍水編『神田人物誌』）

講評と振り返り

予定時刻をやや過ぎた 15 時 30 分頃から、講評が行われた。各チームから代表者が選ばれ、作成した記事の構成や編集の過程について説明を行った。どちらのチームも、情報の整理が適切に行われ、出典の精度も高いバランスの良い記事が完成していた。

ファシリテーターからは、「限られた時間の中で、情報を整理し、適切な構成にまとめられた点が評価できる」との講評があった。一方で、「歴史的背景の文脈をもう少し詳しく記述することで、記事の質がさらに向上する余地がある」との指摘もあり、今後の課題として残った。

ワークショップの最後には、参加者同士で感想を共有し、次回以降の課題や改善点について議論が交わされた。今回のウィキペディアタウンを通じて、単なる記事執筆にとどまらず、地域の歴史を学び、伝える実践的な機会となったことが確認された。

本章の最後に、当日執筆された記事の概要を掲載する。次章では、ワークショップを通じて得られた成果と今後の展望について詳述する。

3 まとめ

本ワークショップでは、神田・神保町地域の災害と復興をテーマに、「文房堂」と「東明館」の 2 つのトピックを取り上げ、ウィキペディアの記事執筆を通じて歴史的背景を掘り下げた。特に今年度は、例年と異なり、学生スタッフが主体的にトピックの選定や街歩きのルート策定を行った点が特徴的であった。学生たちは現地調査と図書館での資料収集を重ねながら、独自の視点でテーマを掘り下げ、執筆対象の決定に至った。

ワークショップ当日は、午前中に街歩きを実施し、執筆対象の周辺環境や関連施設を実際に訪れることで、地域の歴史や災害の痕跡を体感しながら理解を深めた。午後の執筆作業では、ファシリテーターによるミニワークショップを通じて、情報整理の方法を学びながら、参加者同士が

協力して記事を作成した。初心者から経験者までバランスの取れたチーム編成となり、それぞれの知識やスキルを活かしながら作業を進めることができた。最終的には、どちらのチームもバランスの良い記事を完成させ、ウィキペディアに公開することができた。

本ワークショップを通じて得られた成果は、単なる記事執筆にとどまらない。まず、歴史的な出来事や施設について学びながら、その情報を整理し、発信するという実践的な学びの場となった。参加者は、単に「知識を得る」だけではなく、「知識を再構成し、伝える」プロセスを経験することで、より主体的に歴史に関わる機会を得た。また、災害と復興というテーマを通じて、地域の過去を振り返るだけでなく、現在の都市環境における防災の視点を考える契機ともなった。

さらに、ウィキペディアというオープンな知識基盤に情報を加えることで、個々の学びが社会的な価値を持つ形で共有された点も重要である。参加者が執筆した記事は今後、多くの人に参照されることになり、地域の歴史を伝える新たな情報資源として機能する。加えて、ウィキペディアの編集プロセスを理解することで、参加者自身が情報の信頼性や出典の重要性についてより深い意識を持つことにもつながった。

一方で、今後の課題としては、記事の質をさらに高めるための工夫が挙げられる。特に、歴史的背景の記述を充実させ、関係する出来事とのつながりをより明確に示すことが求められる。また、出典の確保や資料調査の段階で、より多様な視点から情報を収集し、記事に反映させることも課題として残った。

ウィキペディアタウンは、単なる執筆イベントではなく、歴史を学び、知識を社会に還元する場として大きな意義を持つ。今回のワークショップの成果を踏まえ、今後も地域の歴史と知識の発信を継続し、より多くの人が歴史的情報にアクセスできる環境を作り上げていくことが求められる。次年度以降も、本ワークショップの経験を活かし、さらなる発展を目指したい。

4 学生スタッフ振り返り

本報告書の締めくくりに、プロジェクトを支えてくれた学生スタッフ二名による振り返りを紹介して本稿を閉じる。

相場健（二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科　谷島ゼミ４年）

本年度のウィキペディアタウンでは『東明館』と『文房堂』をテーマにワークショップを開催しました。私は午前のプログラムである街歩きのルートプランと午後の執筆プログラムで扱う『東明館』の資料集めを担当しました。ワークショップで行った街歩きは午後のプログラムへの導入として上手く機能しました。この街歩きは資料を集めている最中に現代の繋がりとして「路面電車」を発見し、当時の線路をなぞることで今回のテーマを深めることはできると考え計画しました。導入としては機能したものの、道中の空白時間を活用できず参加者同士のコミュニケーションに委ねるかたちになってしまいました。一方、東明館の資料集めでは十分な資料量を用意しリスト化することができましたが、参加者に執筆の根幹になる資料を誘導できなかった点が反省として残りました。今回のチーム運営は 11 月に開催した共同展示会での反省点活かし行いまし

た。スケジュール自体がタイトであったものの進行管理に関してはギリギリながらもある程度計画通りに進行できたと考えています。要所で計画に変更はあったものの時間管理はできており、作業の質の低下を引き起こすことはありませんでした。総括として、ワークショップ当日の質を上げる課題は残りますが、ワークショップ自体は問題なく開催することができました。

竹村優希（二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科　谷島ゼミ４年）

今回卒業制作としてウィキペディアタウン in 神保町 Vol.2 という私も主体となってプロジェクトの準備を行うことは有意義でした。記事にする場所の資料集めを自らの手で行うことで、普段何気なく見ている記事がどうなりたっているのかを考える機会となりました。書くためのしっかりとした出典元、一つの記事を書くことに多くの情報が必要だと調べて改めて感じました。プロジェクトでは当日に資料を見てウィキペディアの記事を書いてもらうことなりましたが、記事を完成させることができたので一安心でした。当日の最初に簡単な書くためのワークを行ったことで資料からの情報の抜き出し方や基本的な作業の共有ができたこと、経験者がいたおかげで作業がスムーズに進み成功できたと感じています。またこのプロジェクト後に先生を含めKPT(Keep Problem Try)の振り返りを行うことで、スケジュールや準備、当日の動きなどの改善点は多くみつけることができました。同時にどうすればいいかも考えることができたので来年の改善点として伝えます。

今回のプロジェクトを通して、ウィキペディアに対するイメージが変わったのもそうですが、プロジェクトの進行に関われたということがとても良い経験になりました。これまで主体となってプロジェクトを進めるということはなかったため、初めての経験で課題やそれに対する改善点を考える良い機会になりました。このプロジェクトはこれからも続くため後輩に改善点を伝えよりよくしつつ、私もこの経験を活かしていこうと思います。